

# 研究通信

No. 131  
1983年1月刊  
村落社会研究会局  
村務事務  
愛知大学文学部  
社会学研究室  
豊橋市町畑1-1  
0532 (45) 0441

## 村落社会研究会

### 第三〇回大会報告

村落社会研究会第三〇回大会は、仙台市茂庭の仙台市勤労者保養所「茂庭荘」で一九八二年十月十七日、十八日の両日開催されました。なおこれにききだつて、研究会創立三〇周年を記念した記念講演会が、十月十六日、東北大学文教大講義室で開催され、竹内利美、中野卓、綿谷勉夫の三会員の有意義な講演会を聴くことができました。今大会は、村研大会創生の地で三〇周年を記念することもあって、例年になく多数の参加者を迎えて、貴重な報告と熱心な討論が行なわれました。

大会運営にあつては、東北大学各学部会員および教育学部教育社会学台研の学生諸君の配慮と尽力により円滑に進めることができ、また記念大会として格別の努力を払っていただいたことを、ここにあらためて心から御礼申し上げます。

大会の印象記は、佐藤勉（東北大）、大沼盛男（北海学園大学）、谷口浩司（仏教大学）の三会員にお願いいたしました。

### 第三〇回大会の光と影

佐藤 勉

個性的で特殊のないし例外的な事柄が、まさにそうであるが故に普遍的のないし一般的な性質を有しているとする「中野講演」に勇気づけられるとしても、ムラ研究に没頭しえない者の独断と偏見に満ちた印象しか残っていないのには、われながら驚いた。

三〇周年記念大会の意義が「過去の輝かしい歴史を確認すると共に、古い皮袋に新しい酒を盛り込みたい」（柿崎挨拶）にあることを知らなかった私が、何年ぶりに村研大会を傍聴して感知しえたのは、いささか大げさにいえば、社会学者に自覚されざる社会学の危機の深化であった。卒直にいえば、ムラ研究のパラダイム転換が社会的現実の側から要

### 八三年度第一回研究会開催案内

今年度の大会に向けて、第一回研究会を次のように開催しますので多数ご出席下さい。

#### 一、テーマ・報告者

- (1) 「第一回宿題委員会の論議の整理」高橋正郎
- (2) 「農政の史的展開と村落」今村奈良臣

一、日時 二月五日（土）午後一時より

一、場所 中央大学会館（因電お茶の水駅下車）

請されている今日、その企てを真摯に追求しないとすれば、それはわれわれ研究者にとって一種の犯罪といふべきなのである。そしておそらく社会学者にとってのそうしたパラダイム転換は、現代社会学全般に対する反省的考察とは無縁ではありえない。経済学者がそれまでの経済学的研究の限界を述べ（高山報告、内山発言）歴史学者がいわゆる歴史的研究の枠を突破して文字通り、現状分析そのものを圧倒的に厚みのある実証に基づいて開陳している（安孫子報告）とき、わが国の社会学を代表すると私には思われる社会学者の村研の有力メンバーからは、総花的な見解や単発的な意見しか聞かれなかったのは、はなはだ残念であった。畏敬とあこがれにも似た気持で参加した私の心は一遍に冷えこんでしまったといわざるをえない。

村研は、もとより、経済学、歴史学をはじめさまざまな立場の研究者から成り立っているのだから、社会学にこだわって社会学の危機などについて述べるのはあまりにも例外的な印象であり、ルール違反といふべきかもしれない。しかし、ムラが亡びつつあるのに村研の懇親会がそれほど盛会なのは変な話だが、村研の中でも、ムラの現状分析に誰れよりもより強く指向した社会学者の影が薄くなるのも、社会学者のはしくれの一人としてたまらなく淋しい思いがする。もっとも、日本農業の危機的状况の中で農民自身が新しい農業を模索しつつあり、そこに日本の農業の夜明けが確認できる（高山報告）のと同様に、こうした社会学の混乱状況の中で、どこかで若い社会学者がその人生をかけたモノグラフをまとめているのかもしれないし、ムラ研究の新しいパラダイムの構想をひそかに深めているのかもしれない。

以上の一般的な印象と合わせて、三〇周年記念大会のプランのせいか第一世代の方々の存在感がいやというほど表われ出ているように思われる。過去の栄光を確かめる見込みなどは完全に実現されたといつてよい。数ヶ月の時間が経過した現在、「記念講演会」での竹内、中野、綿谷の三氏の勇姿は、今なお私の目に焼きついているし、それぞれの威勢のいい声は、いまでも私の耳底で鳴りひびいている。なかでも竹内先生の声いろや眼のいろには何かしら異常な若々しさが感じられた。これほど元気のいい創業者の下では、ここでも世代交代が大変だという思いがした。中野講演も、かなり刺激的な内容で、ある意味では挑戦的できえあった。通常の社会学のアプローチに対する痛烈なアイロニーさえ感じられたといえるだろう。個別的、具体的なものの中に一般的なものを探求する手がかりを求めめるのは、まさにそうだというほかはないが、何が故に個別の現象がそうした形態をとっているのかに関する分析もまた必要とされるであろう。個人史から社会分析へではなく、社会理論による個人史の分析の方向性が不可欠だと思われるのだが……。しかし氏自身の提供されるデータは、そうした懸念を一掃しているといつてよい。綿谷講演を聞いていて、私は不思議なことにユルゲン・ハーバースの社会理論を思い出していた。ハーバースは、市場経済の貫徹しているシステム総合と、それに対抗している生活世界の社会統合の二本立てで社会を分析しようとしているからである。市場経済の原理とは行動原則を異にするムラの原理がそもそも今日ありうるのかどうか現実には問題なのだ（高山報告）が、ムラに生きていく人々の行動原則にまで立ち入ってまで、経済的メカニズムを探究する姿勢として受け取れば好感がもてる。

第一世代の三氏の「記念講演」および十七日午前の課題報告からはいろいろ教えられたばかりでなく、われわれ後行する世代の不勉強、とくに社会学者の怠慢を責められているような気がしてならなかった。安孫子報告は内容が豊かで、時間の制約の故に、もっとも聞きたかった戦前期については十分な説明がなかったのは惜まれる。だが、おそらく理論的立場の違う人であれ、氏自身の枠組からの近代村落のエッセンスについての明示的な了解を得たであろう。欲を言えば、小農社会としてムラをみるという本質規定にとどまらず、私としては現代日本における小農社会がいかなる存在形態をとっており、そこで繰りひろげられている農民生活がいかなる内容のものなのかについての理論的説明を聞きたかった。しかし、氏からいわせれば、それこそ社会学のテーマということになるであろう。安孫子報告に接続しうる社会学的アプローチの具体化が切望されるゆえである。長年にわたって一つの対象地を分析している点でも理論と実証との着実な連関の点でも、そこに生きる人間の声に耳をもつ点でも中野発言をまつまでもなく、安孫子報告は単なる社会学的研究というよりも、今日の社会学者が学びとらなければならぬ要素をふんだんに有しているというべきだろう。

社会学に対する私の反省の気持は、次の高山報告とそれに関する内山発言とみに高まった。

高山報告は、戦前の日本資本主義の解体、変化という認識に立って、「戦後日本農業の経済的枠組」を特定しようとする。端的に言えば、戦後においては国家行政レベルの非経済的な原則が、農業経済を貫徹しているという。稲作中心主義の転換をせまったり、農産物の過度の自由化

の問題が論じられたり、農業経済のあり方をめぐるカウツキー・ルダビツト論争に言及されたりして、結局のところ、日本農業の危機的状況の中で独立的、自立的な農業が不可能ではないといわれたように思う。高山氏にとっても市場経済の荒波の中で存立しうる農業のあり方を現実的に考えることが根源的なテーマなのである。小商品生産者という本質規定にとどまらず、国家レベルの政治の状況を考え、そうした構造の下で生きている農民生活の現実的形態について想いをさせる氏の姿勢もさることながら、現在の農業の危機を考えるためには、これまでの経済学のパラダイムでは不十分だと断言され、生態系の再生産メカニズムとの関連で農業を捉える視角を強調されたのは、会場の多くの人々の共感をさそったと思われる。それに関連して内山政照氏がほ次のような主旨の発言をなされたのは注目されてよい。「現代社会の危機は有史以来最大のものだ。そこで現代とは何ぞやをじっくり考える必要がある。そのためには、実証的研究を十年ぐらい休んで新しいパラダイムの構築に専念したらい。なによりも、経済的側面ばかりではなく、そこで生きている人間を捉えきらなければならない。その点で生活史からのムラ研究の企ては面白いが、本当に整えなければならないのは生きている人間の生まのいぶき、そのイッヒハイトないしレーベンディッヒカイトなのだ。自殺したいほど悩んでいる農村青年に対して、国家独占資本主義が悪いといっても不十分きわまりないじゃないか。」山内発言を的確に要約しえたつもりはないが、少くとも私にとってはこの爆弾質問は、現代社会科学の根幹にかかっていると思う。ただし高山報告も、内山発言も、いわゆる構造的アプローチを否定しているのでは勿論ないだろう。それは、

これまでの分解論の問題ともつながっている。分解論はその本質規定の水準にのみ固執することなく、分解状況下でそれぞれの農民にとって現実的に考えられる生産と生活の可能性を明らかにし、さらにそうした客観的可能性に対する農民の主観的な判断の世界へふみ込む必要があらう。いってみれば、農民の主體的、主観的な世界を捉えうる構造的アプローチが要請されているのだと思う。

いづれにせよ、自然の生命活動の一環としての生産につながりうる農業生産組織の現実的形態が、この現代社会でいかなる形で可能とされているのかを見きわめなければ、高山・内山両氏の問題提起に応えられな

いであろう。

残る三人の報告者もそれぞれ興味はもたれたが、整理能力の抜群という点では意見報告が印象に残った。連帯概念の多用は気になったけれども、管理社会化の進行しているプロセスにおいて農民の新たな連帯がいかにして可能なりやが問題だといわれれば、まことにそうかどうかはわからない。だが、整然とした分析は、実はそれに見合った実証の集積と、それを把握しうる鋭い分析枠組によって支えられなければならないとも空しいといわざるをえない。経済学者が自らのアプローチの限界をのべ、そのパラダイム革新を訴え、歴史学者が「社会学本来の研究」にまで手をのばしつつあるとき、われわれ社会学者だけが、その方法も対象も茫漠としているというただそれだけの根拠によって、いせんとして理論なき実証に専念したり、実証と無関係な空想的な見解にふけったりし、そのパラダイム革新に無関係でいられるのだろうか。

### 第三〇回大会に参加して

大沼盛男

村研第三〇回大会が、くしくも第一回大会のゆかりの地、仙台で開催されるということで、紅葉には未だ早い中秋のみのくを訪れた。私は実の所、村研に入って日が浅く、一九七九年の糠平大会からであり、全国大会参加はこれでわずか二度目である。したがって新入会員が大会の感想を述べることには、私自身、大きなたじろぎと抵抗があることを認めないわけにはいきません。それを敢えてお引受したのは、私が糠平大会で「農村自治——その制度と主体」の課題報告をして帰札した翌月、所属していた北海道立総合経済研究所が行革の名の下に廃止通告を受け、その後、全国の研究者の方々、とりわけ村研の会員各位から大きな支援を戴いたことの御礼も申し上げたからです。それと村研第六回大会の開催地鳴子町は、私が戦後間もなく旧制高校に入るまで過した故郷で、今回墓参も兼ねていたため、討論に十分参加できなかった点を詫びたいと思っただけです。

大会の感想を先どりして述べれば、「農地改革」論議を中心にした第一回大会の共通論題が、戦後三十数年の農村、農民の変貌と村研三〇年の研究課題と見事に重なり合って、今なお、原点となって現代的に問い直す必要を提起した大会ではなかったかと思われることです。以下、主として第二日以降の課題報告のうち、関心のある御報告に限って感想を述べたいと思う。

第一報告の安孫子麟氏の「近代村落の本質と展開過程」は、近代村落

はもはや村落共同体そのものではなく、小商品生産者としての小農が形づくる社会関係・の変容過程としてとらえ直す視点から、その具体的領域を行政区・村落・六親講の三局面におき分析を試みる。対象地区は地主制研究の宝庫でもあった宮城県南郷町であり、うえの三局面の内在的な変容と関連を明治期の資本主義確立以降、国家独占資本主義形成期の戦時体制期に及ぶ長期に亘って克明に分析する。そして、近世村の解体・変質から生ずる行政的村落Ⅱ区と村落独自機能としての部落が、いかなる結合と分化の過程にあったかを、村落の行政機能・共同機能・秩序支配・生活構造という多次元の変質過程と対応させて論述した。その上で、今日の集落の結合原理は、経済的には自作農主義の商品生産、政治的には新憲法に基づく民主主義・生活的には協同組合主義に支えられると結論づける。

第二報告の高山隆三氏は「戦後日本農業の経済的枠組」と題して、今日の農業問題の基底に食糧自給率低下の構造を挙げ、その近代資本主義諸国間の比較研究をベースに、今日の農業矛盾を、自由な商品生産者としての農民の形成が、国独自の市場編成、価格政策メカニズムによってゆがめられる構造に起因すると指摘する。それは米に代表される現代的価格形成の必然的帰結として、食糧、補助金等の非市場経済的政策と結合して、今日の農民は本来商品生産者であるべきものが価格主導をとれない性格に押し止められ、その限りで「むらは生きていけるような形」にあると述べている。さらに基本法農政における自由化の無批判な導入、その下で展開する稲作・畜産をめぐる矛盾を農法論的に如何に修復し、地域農業の自立的発展をいかに求めるかは、今日の農業危機の構造にお

いてこそなお検討されるべき課題であると結んでいる。

川口諦氏の報告は、農総研グループが一貫してとり組んだ酒田市近郊の豊原村調査から本百姓を起点とする農民層の動向を、商品経済の滲透、在来農法の堅持、土地所有関係における村の管理に及ぶ広い範囲から追求している。その中で時間的・空間的分業の統合体としての農村社会が、季節・世帯循環の生活形式と生活における自己規制と社会規制をくぐり抜けながらも静かに持続するなりわいを強く訴えられた報告であった。そして今日の庄内農村は「国の農業行政の中で無視すべき零細農家も村の社会生活では自治村落の公権的機能に対して一家一業的な法的平等を尊重され」、「階層分化の一定の進展の中でも、なお家の維持・再生産のメカニズムはゆるぎなく機能している」と結論づけている。

二日目最後の蓮見音彦氏の「村落と村落論——その推移と課題」は、村研三〇年の研究軌跡の上に立ち、村落の抱える課題と村研課題との位置を明らかにしようとする、いわば総括的報告であった。氏は「自営小農民の形成する地域的連帯としての農業村落Ⅱ消費生活・経営単位としての二重の意味での連帯が、いかなる契機と展開を経て、今日の農村社会の特質を規定づけ、その可能性が与えられるか」という問題意識から出発する。今日、農村社会に多様化して現われる「管理化」に対して、民主的組織化を対置し、小農の自己防衛と農村をとりつつむ多面的諸階層の協力、協同関係の必要性を提起し、そこに展望を求めている。

総じて、日本資本主義の展開に伴って、農村の変貌が克明に論ぜられ、今日の農村と農民の性格が、いかなる歴史的契機を経て形成され、それが農村の構造といかに関わっているかを一貫して追求する論調の大会で

あったといえる。その底を流れるものは、今日の農民像が多様化し、現代的視点のみで截ることは多くの誤謬を生む危険があるという視角が重要であることを物語っているように見受けられる。その意味で、戦前と戦後を画した農地改革後の農民に胚胎している商品生産者の側面と自営農的性格の二重の刻印が、戦後資本主義の畸形的な蓄積と再生産に巻き込まれる諸関係の究明が今日なお深化させる必要を痛感させる大会であった。冒頭に述べた第一回大会の現代的再評価をクローズアップさせたという意味で、三〇年という記念すべき大会に最もふさわしい内容であったといえよう。

とはいえ、戦後農民の把握において、各論者の認識にはそれぞれ独自性と格差があり、その資本主義への編入、政策プロセスへの包摂とその対抗という点で、もっとつきつめた議論がほしかったというのが実感である。

帰路の車中で、内山先生が「部落は死んだ化石か植物か」という発言や「農民の主体研究の前に研究者の主体形成が問題」という警句や、島崎先生の農民層分解論の今日的到達点に関する厳しい論評を衝撃に近い思いで刻み込みながら、故郷へ向った。

### 第三〇回大会参加記

谷 口 浩 司

「東北の夜明け」から「東北の文化破壊」とまで論議をよんだ東北新幹線に初乗車、やまびこは「みちのく」をひた走り、仙台駅にすべり込んだ。仙台は初冬を思わせるかのような冷え込みで、改めて東北の

地に立つことを実感させられた。タクシーをとばし、東北大学へと急ぐ。記念講演会の会場となっている大講堂は満員で、中野先生の「村の生活史」と題された講演も、すでに終り辺りにさしかかっていた。近年手がけておられる個人生活史の発掘と、そこをとおして村の論理に迫ろうとされる熱のはいった話であった。続いて綿谷起夫先生の「農政の展開過程と『むら』」では、戦時下の部落責任供出制度から現在の水田利用再編対策事業制度に至るまでの農政―市場原理―と、それとは異質の原理として生きている「むら」についての講演であった。最初の講演になっていた竹内利美先生の「むらと制裁」については、遅刻したために聞けなかったが、レジメによれば、ご自身の村研との係りに始まり、近世・近代をとおして存続した「むら」の自治的性格とその限界、さらにはその解体過程をとおして新しい地域社会生活をいかに展望するか、といった内容になっていた。ともあれ三〇周年記念講演会は、座席が足りないほどの盛会のうちに終り、とつぷりと日の落ちたなかを、翌日から二日間の大会場となっている仙台市郊外の茂庭荘へと移動した。余談になるのだが、宿舎へ向うバスで中野先生と同席し、道中、先生からハワイ日系女性の生活史について話しを伺うことになり、遅刻分を取り返した思いであった。

さて、今年第三〇回大会ということで、共通課題「村落の変貌と村落社会研究―三〇年の歩みをふりかえって」に向けて、安孫子麟「近代村落の本質と展開―明治ノ戦前期を対象として」、高山隆三「戦後日本農業の経済的枠組」、松本通晴「近畿村落の変動と村落研究の諸系譜」、蓮見音彦「村落と村落論―その推移と課題」、川口諦「山形県

庄内地方の農村の動向」の五本の報告が準備され、自由報告はなされなかった。

安通子報告は、宮城県南郷村を事例として、小農経営を基盤とした近代村落を三局面——行政区、部落、六親講——の分化形態として整理を試みたもので、行政機能、村落の秩序、支配構造、生活構造、村落の独自の共同機能についての「ズレ」を明解に提起した。高山報告は、戦後日本農業の生産と農産物消費の構造的特質の表現としての食糧自給率を、極端なまでに低下させたメカニズムの解明が、主に西ドイツとの比較によって試みられた。農産物の自由化の促進と他方での食糧制度による米価の政治的決定という相反する枠組みにこそ、戦後日本農業の問題が見出されるべきであり、「むら」が生きているのではなしに、生かされている。論理がこれまた明解に示された。松本報告は、近畿型村落といわれる特性とその解明の試みを研究史の整理として示したものであり、川口報告は「善治日誌」をとおしての農業及び生活の諸形式、そこにみられる自己規制と社会規制についてを内容とするものであった。蓮見報告では、農業解体の過程が逆に農村の多様化をもたらし、社会的、文化的な枠からもとらえかえす必要があり、農村はすでに農民だけのものではなく、村落を越えた新しい組織化が展望されなければならないとされた。

総括討論は、司会よりあらかじめ、(一)小商品生産、(二)村落の地域的差異、(三)方法論といった三つの論点が用意された。旅行三日目の午後となつては、頭の方も定かではないのだが、義務を果すべく綴ったメモを見ると、時間の大部分を(一)をめぐって費やしている。その主な発言は、(イ)農業の危機とは何か、(ロ)農民の主体性とは何か、(ハ)社会科学としての農

民層分解論、(ニ)小農範疇の問題などであり、充分に討論が深められないまま第二の論点に移行していた。(三)については、西南日本先進型と東北日本後進型をめぐって、その論拠と妥当性についていくつかの発言が続いたが、時間切れで第三の論点に及ばないまま、これからというところで終った。率直に言って、一年間の準備に比して、総括討論は必ずしも充分であつたように思えなかつた。

三〇年は人生の区切りであり、その意味で時代の一区切りにもなる。十年一世代とすれば、村研三代(村研創設の大先生方はそれ以前の世代になられるだろうが)、五〇年代に農地改革、六〇年代に農民層分解七〇年代に主体的再編と、日本資本主義の発展と交差する軸を基本軸に課題を立ててきた。八〇年代もこの軸に課題が見出されるだろう。そして関東地区研究会においても議論されているように、「村づくり」「コミュニティ計画」は、より一層農政として推進されることになるのではないだろうか。その点で、私もまた「システム」は避けられない問題であるように思う。

近年、日本文化論、日本人論など「日本的なるもの」についての議論がかまびすしい。システム論者による『文明としてのイエ社会』などといった大著もみられる。そうしたことと重ね合せながら、村研もいよいよ文化論、といったいささか勝手な、期待と不安を抱きながら、私は会場を後にした。

### 第三〇回大会

#### 総会報告事項と決定事項

#### 一、事務局報告

(1) 運営委員会、実行委員会、研究会他

第一回運営委員会を十一月十四日に開催し、そのあと六回にわたり開催した。

三〇周年記念事業を遂行するため、旧来の宿題委員会に代り、実行委員会を設けることが前総会で決定され、全国で十七名の実行委員が選出されていたが、第一回実行委員会が一月九日に開催され、それ以後運営委員会との合同委員会が四回、実行委員会が二回にわたり開催された。

研究会は第一回が二月六日東京で開催され、第二回研究会は各地区毎に開催された。東北地区四月二十四日、関東地区五月十五日、関西地区では二回にわたり開催され、五月十五日、七月三日にそれぞれ開かれ、北海道地区では六月二十六日に開催された。

研究会の内容については研究通信一二六号から一三〇号を参照いただきたい。

三〇周年記念事業の一つとして、村落社会研究会創立時に活躍された内山、小池、内藤、中村、福武各会員による座談会を六月五日に開催した。この内容は村研通信一二九号を参照いただきたい。記念事業のもう一つ講演会は、十月十六日、講師として竹内、中

#### 二、会計報告

野、綿谷各会員を迎えて開催された。

(2) 研究通信は一二六号から一三〇号までの五号を発行した。一二九号は座談会を特集として発行した。

(3) 会員数は一九八二年十月十五日現在で、三四五名である。この期間の会員移動は、新入会員八名、退会会員五名、死亡二名(木下彰、宮本常一氏)である。

#### 村研 1982年度 会計報告 (82年10月16日現在)

収入の部		81年度	82年度
前年度繰越	金入息入	1,708	27,081
年会費	収入	975,292	938,000
雑収入		12,042	2,858
		0	4,000
合計		989,042	971,939

#### 支出の部

研究通信印刷費	444,000	417,000
名簿印刷費	115,000	0
郵送料	249,950	219,710
連絡通信費	40,931	45,045
会場費	8,700	19,080
文具・消耗品費	15,905	42,659
講師謝金	44,700	0
引継謝金	12,775	0
事務謝金	30,000	60,000
雑支	0	3,450
小計	961,961	806,944
特別会計収支不足分	—	24,090
次年度繰越	27,081	140,905
合計	989,042	971,939





第 30 回 村 研 大 会 決 算

収 入	加 費	1,000×130	130,000 <sup>円</sup>
大 宿 會	参 泊 費	4,150×173	717,950
昼 食	費	550×120 )	103,800
		450× 84 )	
懇 親 會	費	3,000× 95 )	306,000
パ ス 代	金	4,200× 5 )	
東 北 大 学 補 助		400× 52	20,800
			50,000
収 入 計			1,318,550
支 出	會 費		1,113,700 <sup>円</sup>
宿 泊 會 通 交 通 人 備 雜	宿 泊 會 通 交 通 人 備 雜		
會 場 信 件 消 耗 品 費	會 場 信 件 消 耗 品 費		
懇 親 會 費	懇 親 會 費		18,000
懇 親 會 費	懇 親 會 費		22,540
懇 親 會 費	懇 親 會 費		44,000
懇 親 會 費	懇 親 會 費		61,000
懇 親 會 費	懇 親 會 費		43,878
懇 親 會 費	懇 親 會 費		15,432
支 出 計			1,318,550
差 引 残 高			0

運 営 委 員 会 報 告

第 一 回 運 営 委 員 会

新しい事務局のもとで新運営委員による第一回運営委員会が、一九八二年十月十八日、大会会場の茂庭荘で開催された。

まず新事務局（愛知大学牧野由朗会員、渡辺正会員）と新委員の紹介が行なわれ（十二頁参照）、会の連絡運営を円滑にするため地区別の連絡係をつぎのように決めた。

北海道地区 白樫 久  
 東北地区 田原音和  
 関東地区 島崎 稔  
 東海・関西地区 松本通晴  
 中・四国・九州地区 木下謙治

つづいて、今年度の共通課題について検討された。大会会場での会員からの課題提案と各運営委員の意見が紹介されたが、イエ・ムラの原理的検討、および現代の農政の批判的検討という二つの問題におおよそ集約することができ、共通課題を「農政とむら」という方向で設定するよう検討し、次回運営委員会で決定することにした。そして共通課題が決まり次第宿題委員会を編成し課題研究の具体化を急ぐことになった。

また編集委員については、今後の「年報」の出版契約の交渉等の関係もある中で中野卓会員、安原茂会員を中心に組織することにし、次回運営委員会で選出することになった。

第 二 回 運 営 委 員 会

第二回運営委員会が、一九八二年十一月二十七日、中央大学会館で開催された。議題は、

一、一九八三年度予算について

一、共通課題の決定と宿題委員会の組織について

一、編集委員会の組織について

一、研究会の開催について

一、その他

総会で来年度から予算をたてて会の運営を行なうことが決定されたが、今年度は、とりあえず運営委員会で検討することにし、事業計画などとあわせて審議された。審議決定内容は次のとおり。

一、予算、事業計画について

(1) 運営委員の地区別について

今年度から、中国・四国・九州地区を設け、全国を①北海道、

②東北、③関東、④東海・関西、⑤中国・四国・九州の五地区に区分する。

(2) 「研究通信」は一月、四月、六月、九月の年四回発行の予定とする。

(3) 共通課題設定の参考資料および会員相互の研究交流を深めるために各会員の研究動向をアンケート調査し、「研究通信」誌上で紹介する。

(4) 会員名簿の改訂を行う。

(5) 事務局委員の交通費については、一名分実費を補助する。運営委員の交通費については、三〇〇円を越える委員に三千円を補助し、これらは、会議費で支出する。

(6) 編集委員会に編集費として、連絡通信費のうちから一万円を付託する。

(7) 本年度予算は、とりあえず別表のとおりとする。(十三頁)  
二、共通課題と宿題委員会について

(1) 課題は「農政と村落(むら)」とする。

(2) 上記課題設定の位置付け、あるいは研究のための柱だて等、研究の枠組を具体的に検討し、研究会でそれを深化させる。

(3) その場合、研究方向の基本的視点として、

(イ) 歴史的アプローチを中心に、「農政と村落」についての史的展開を整理し、できれば段階区分を行なって、それにもとづいて研究を進めることが必要である。

(ロ) 生産調整や地域農業など行政による村落(むら)の見直しと再編成が展開されており、この現代段階における農政と村落の実態をどう把握したらよいか、今日的な問題として再検討する必要がある。

などが提案され、今後の研究会では、これらの諸問題を基本にしながら研究を進めて行くことにし、宿題委員会でさらに研究の進め方など具体的な事項について検討する。

(4) 新宿題委員は別表のとおりとする。(十三頁)

(5) 研究会は、大会に向けて三回開催する。第一回は、一月末または二月初めに開催し、共通課題の基本的問題について研究する。

第二回は、五月頃に、各地区ごとに全体研究会の方針にもとづいて研究を深める。

第三回は、七月八月に、全体で各地区の研究会の成果を集約、検討する。

三、編集委員会について

- (1) 編集委員は別表のとおりとし、委員の内に幹事を二名置く。
- (2) 編集委員会の役割は、主として編集事務および自由投稿審査等とし、年報出版についての出版社との交渉等については、在京委員が接渉し、重要事項については運営委員会で確認決定する。
- (3) 三〇周年記念号については、外国における村落研究の動向をできれば掲載する。また「自由報告についての編集方針」を研究通信で広報し、徹底をはかる。

四、その他

- (1) 第三十一回大会の開催は、茨城県久慈郡大子町の予定であることが紹介され、時期は十月中旬に計画する。
- (2) 「年報」のバックナンバーを整理し、必要部数を保存して、残部は要望のある方に頒布する。また「研究通信」については、希望者に送料込みで一部二〇〇円、とくに厚部の号は三〇〇円で販売する。

新 役 員

○運営委員 (◎印は地区連絡係)

北海道地区 (三名)

大沼 盛男 ◎白樫 久 布施 鉄治

東北地区 (六名)

安遜子 麟 岩本 由輝 菅野 正  
◎田原 音和 不破 和彦 細谷 昂

関東地区 (十四名)

宇佐見 繁 柄澤 行雄 柿崎 京一  
黒崎八洲次良 佐々木 豊 ◎島崎 稔  
高橋 明善 高山 隆三 中野 卓  
蓮見 音彦 長谷川昭彦 東 敏雄  
皆川 勇一 安原 茂

東海・関西地区 (七名)

岩崎 信彦 北原 淳 鳥越 皓之  
中田 実 牧野 由朗(事務局)  
◎松本 通晴 渡辺 正(事務局)

中国・四国・九州地区 (四名)

岩谷三四郎 大野 晃 ◎木下 謙治  
中村 正夫

村落社会研究会 1983年度予算

収入の部

項目	金額	備考
前年度繰越金	140,905円	
会費収入	1,200,000	4千円×300
利息	2,500	
雑収入	4,000	通信販売金等
合計	1,347,405	

支出の部

項目	金額	備考
研究通信印刷費	450,000円	4回発行分
名簿印刷費	130,000	
郵送料	250,000	
連絡通信費	60,000	
会議費(会場費・交通費)	150,000	
文具・消耗品費	150,000	
講師謝金	30,000	
事務謝金	60,000	
雑支	4,000	
予備費	163,405	
合計	1,347,405	

○宿題委員

岩崎 信彦  
木下 謙治  
高山 隆三  
大川 健嗣  
黒崎八洲次郎  
不破 和彦  
高橋 正郎  
高橋 明善  
大野 晃  
柄澤 行雄

○編集委員

(◎印は幹事)

安遜子 麟  
後藤 和夫  
田原 音和  
蓮見 音彦  
◎安原 茂  
余田 博通  
柿崎 京一  
島崎 稔  
◎中野 卓  
布施 鉄治  
小池 基之  
嶋田 隆

第一回宿題委員会報告

昨年末十二月二十五日(土)に第一回の宿題委員会が中大会館で開催され、すでに運営委員会で設定されている共通課題「農政と村落(むら)」をめぐって、研究の視点・方法などについて検討した。

そこでは、①いま、なぜ「農政と村落」という課題を設定し、何が問題であるのかという課題設定の位置づけと問題の所在の明確化、②村研大会へ向けての研究の方向性、③第一回研究会の準備などが主として論議された。とくに課題設定の位置づけと問題の所在については、「農政」と「村落」の関連性をめぐり、焦点の置きどころ、用語、概念の理解、研究の視角など具体的な討議が行われ、次のような概要の論点がいくつか提出された。

① 「農政と村落」という場合、どちらに焦点を置き、相互の関係をどう把握するのか。

② 「農政」とは何か。ここでは、国の農政を意味するものとするが、その場合、戦前からの産業・経済政策としての農業政策と農村計画に見られるような農村政策とに区別することができるので、農政の展開過程を整理し、いまあらためて農政で村落が問題になる要因を明らかにする必要がある。

③ それには、今日、国が村落を把握せざるを得ない農業危機、経済危機、国家財政の危機といった危機的状況があること、またこれに対応する村落の内発的な動きとの葛藤としての農政が展開していることから、国の論理と村落の論理の関係を視点にすえて検討する必要がある。

るのではないか。

④ 具体的には、補助金制度を中心にした農政を通じて浸透する村落の国家的支配の展開過程、およびその構造を明らかにすること、さらには現段階における問題を解明することが重要な課題ではないか。第一回研究会では、以上の論議を整理するとともに、村研大会へ向けての基礎的作業として、今村奈良臣氏から「農政の史的展開と村落」について報告を受け研究することにした。

### 第三十一回村研大会

#### 開催予定地の横顔(1)

—茨城県北部農山村の中心地

茨城県久慈郡大子町—

今年十月中旬に予定される第三十一回村研大会の会場設営を担当した茨城の村研会員は着々と準備を進めています。県の外から眺めるとき、茨城といつて念頭に浮ぶのは、南に県境を画して流れるあの大利根、田畑・平地林入り混って広がる平坦な関東平野、霞ヶ浦、筑波研究学園都市、そして鹿島灘に沿ってゆるやかな曲線を描く海岸線、そこに戦後立地した鹿島コンビナート、原子力諸施設、あるいは明治末、県北部海岸に近い日立鉾山の附属工場から生れて発展した日立製作所、などでしょう。あるいは大洗を介しての海のイメージも。

しかし茨城県にはもうひとつの顔があるのです。県北部の農山村地帯。海岸線を除けば、この地帯は東から里川、山田川、久慈川、そして緒川の緒川に沿って拓けた四本の山合いの沢とそれを囲む山々によって成り立っているのです。里川と山田川は久慈川に合流して太平洋に注ぎます。緒川は県北ならぬ県央の川、那珂川に合して太平洋に流れ出ます。だから県北山間部の多くは久慈川をもってその心の故郷とする、こう言ってもよいかもしれません。

大子町はこの久慈川の上流にある茨城県北部農山村の中心地です。往古は措くとしても、水戸藩に属した近世このかた現代に至るまで、この大子町域は日本の歴史を垣間みるに足るような事実を刻みながら歩んで来ているのです。幕末の新興ブルジョアジーと尊攘派の下級武士たちとの結びつき、そして諸生・天狗にわかれた抗争、明治末以降の鉄道建設をめぐる政党和地域社会、専売局からは自立して明治三十八年以降同業組合形式をとり続けた大子煙草生産同業組合。この前提には明治十年代の農談会このかた活発な農事改良の活動がありました。

昭和になると、同二年には農事組合員中の精農によって演劇「栄えゆく村」が上演され、八年には経済更生運動の中で、続編「更生の巻」が創られ、十二年には映画化されています(この映画は時間が許しますならば村研大会で活弁付きで上映したいと思えます)。橋孝三郎が主催する愛郷会の支部も昭和六年には町域の袋田に設けられています。

ともかく『研究通信』のスペースがいただけですなら、「横顔その(2)」、「その(3)」と続け、村研大会に相応しい「土地」柄にしてゆきたいと思っ

(東 敏雄会員)

## △年報編集委員会からお願い▽

年報第十九集は既報の如く第三〇回大会の共通課題「村落の変貌と村落社会研究——三十年の歩みをふりかえって」を特集として編集することとなっておりますが、この共通課題テーマに即した論文を投稿される御希望がありましたら、下記の要領を御参考に編集委員会あてレジュメをそえてお申下下さい。編集委員会では検討のうえ、あらためて執筆要領などを御連絡致します。なお、年報原稿の〆切は四月末日ですのでこの点御了承下さい。

- (1) 内容は共通課題に即するもの。
- (2) 希望申込〆切 四月末日。
- (3) 申込先 年報編集委員会（中野 卓、安原 茂）

## △事務局からお願い▽

### 一、会費納入について

会費納入の状況と請求を「研究通信」に同封いたしましたので、滞納されている会員は、是非納入下さるようお願いいたします。

なお、会費は一九八二年度までは、年三〇〇〇円、一九八三年度は年四〇〇〇円です。承知下さい。

二、『村落社会研究』第十八集を未購入の方は、是非ともお買い求め下さるようお願い致します。会員は二割引になります。（定価四二〇〇円）

内容は次のとおりです。

### △共通課題——農村自治の課題の展開として——

- 一、明治・大正期の農村計画構想 佐々木 豊
- 二、昭和初期農村経済更生運動と農村計画 森 芳三
- 三、米の生産調整と農民の対応 武田 共治
- 四、農村計画における合意と集落 工藤 清光
- 五、一九八一年度研究会報告と大会討議の要点 岩 本 由 輝・高 橋 正 郎・岩 崎 信 彦

### △自由課題△

- 一、日露戦後の「町村自治」振興策と国民教化 不破 和彦
- 二、「大正デモクラシー」期における農民経営の歴史的性格 東 敏雄

### 三、集団栽培後の生産組織と農民層の対応形態

——鶴岡市京田地区林崎部落の事例——

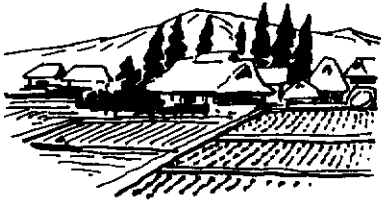
横 山 敏・小林 一穂

### △研究動向△

- |                    |         |
|--------------------|---------|
| 史学・経済史学における村落研究動向  | 嶋 田 隆   |
| 経済学における研究動向        | 中 島 常 雄 |
| 社会学における農村研究の動向     | 木 下 謙 治 |
| 社会人類学における村落社会研究の動向 | 上 野 和 男 |

三、「研究通信」残部の頒布について

これまでの「研究通信」の残部がいくらかありますので、希望者は、  
号数を指定のうえ、事務局までご請求下さい。なお頒価は送料込みで、  
一部二〇〇円（薄部の冊子）、三〇〇円（厚部の冊子）です。



住 所 ・ 所 属 変 更

- ・ 内山政照 農林省農業総合研究所 → 東京農業大学
- ・ 酒井恵真 札幌市南区澄川5条11丁目389-2169  
    <加>
- ・ 坂本喜久雄 福岡県筑紫郡太宰府町大字太宰府 → 福岡県太宰府市梅香苑
- ・ 佐藤康行 大手町9-17 → 大手町9-7
- ・ 竹安栄子 関西学院大学大学院 → 追手門学院大学
- ・ 武田共治 東北大学教育学部 東北大学大学院  
〒980 仙台市川内明神横丁37川内荘 → 〒982 仙台市長町5丁目5-3
- ・ 丹野朝栄 〒120 江戸川区西小宮3-14-1  
    沢柳マンション501号 → 〒980 仙台市三百人町154
- ・ 鳥越皓之 堺市鴨ヶ谷3-3-5-309 → 堺市三原台四丁目15-9
- ・ 新妻二男 盛岡市箱清水一丁目34-14 → 盛岡市青山4丁目17-48-201  
    公務員宿舎 TEL 0196-46-7526
- ・ 渡辺正 豊橋市南小池町173 → 豊橋市南栄町空池168
- ・ 若林敬子 豊島区南長崎2-3-22 → 新宿区西新宿4-1-10  
    東建ニューハイツ西新宿907  
    TEL 03-376-3819
- ・ 大淵英雄 〒222 横浜市港北区綱島西1-17-5 → 〒227 横浜市緑区みたけ台14-8  
    TEL 045-541-0747      TEL 045-973-1440



## 新 入 会 員

氏 名	所 属	〒	住 所	T E L
佐 藤 利 明	東北大学大学院	982	仙台市向山2丁目12-11 吾妻荘27号	
秋 津 元 輝	京都大学大学院	606	京都市左京区吉田中太路町34-72 山本方	075-761-6931
江 上 涉	都立大大学院	181	三鷹市中原4-12-16	0422-44-2805
中 道 仁 美	京都大学大学院	606	京都市左京区岩倉中在地町22-10	035-701-3571
上 <sup>うえ</sup> 羅 廣	上野学園大学	344	春日部市南3丁目15-15	0487-38-0392
三 本 松 政 之	中央大学大学院	272-01	市川市行徳駅前2-26-3-204	0473-97-7934
村 中 知 子	茨 城 大 学	310	水戸市渡里町3322-1	0292-24-8334
浅 野 慎 一	北海道大学大学院	001	札幌市北区北23条西14丁目 清水マンション	011-723-5902
西 尾 純 子	北海道大学大学院	001	札幌市北区北13条西1丁目 鈴木方	
塚 本 幸 史	東京学芸大大学院	199-01	神奈川県津久井郡相模湖町千木良1305-6	
古 賀 倫 嗣	愛 知 大 学	440	豊橋市瓦町78 愛大教職員住宅B2号	0532-62-7530

米村昭二	1. ヨーロッパにおける儀礼的親族関係 2. 集団移住開拓農村における村落の形成と発展	ヨーロッパ 北海道栗沢町新波	個共
若林敬子	学区、学校統合と村落社会		個
渡辺正	1. 豊川総合用水事業と流域社会の変容 2. 水問題と水源山村の変容	東三河地方 岐阜県徳山村、板取村	個共
渡辺安	1. 農村の再組織化と生活環境施設 2. 瀬戸大橋の架橋に伴う地域社会の変動と住民生活	香川県三豊郡大野原町 香川県坂出市、岡山県倉敷市、島山興部	個共
綿谷赴夫	食糧管理制度		個
大野晃	1. 現代山村の構造——山村の経済・社会・政治構造をトータルに把握し、現代資本主義の危機の深化とその対応を分析—— 2. 山村社会と環境問題——自然と人間の共存する可能性を体制の危機とのかかわりで研究——	高知県十和村古城部落、小野部落 沖縄県八重山郡竹宮町西表島	個
柿崎京一	近代日本の家と村落	岐阜県大野郡白川村および高山市周辺	個
諏訪園岩雄	へき地の教育問題		個
竹安栄子	日本における近代化に関する社会学的研究 ——農村・家族の近代化——	福岡県久留米市およびその周辺地	個共

氏名	研究テーマ	調査地	個人共同
安原 茂	1. 首都近郊村落の変容 2. 巨大工業都市の社会構造	茨城県稲敷郡東村 川崎市	個 共
谷口 肇	新生活基本構想（第17回全国農協大会 1985で決議する農協の農村生活活動の長期方針）	全国	共
谷田部 武男	農業生産組織の展開過程と村（稲作生産組織が中心）	宮城県鹿島台町山船越、岐阜県瑞浪市	共
山岸 治男	農家析出成員の社会化と自律化の過程	大分県国東半島、同日田郡	個、共
山崎 達彦	東北農民の社会意識における「タテマエ」と「ホンネ」	岩手県軽井町車門部落	共
山下 袈裟男	「地域社会計画と住民参加」を主テーマとして、特に「地域福祉計画と住民参加」に焦点をあてている。	東京都保谷市、58年度は埼玉県富士見市を予定	共
山本 英治	沖縄社会の構造的特質	沖縄	共
山本 登	部落問題論	とくに一定の地域なし	個
山本 史博	途上国における農協の現状と発展の条件 ——とくにタイを事例として——	タイ国各地の農村	個
横山 英勝	社会構造記述の研究		
横山 敏	地域の社会問題と住民の学習	福島県柏馬郡小高町福浦地区	共
与那国 進	戦後沖縄の地域変動	沖縄本島	個
米沢 和彦	過疎地域における老人問題	熊本県球磨郡水上村	共
米地 実	近代における村落祭祀構造の推移	山梨、茨城、愛知	個

松原治郎	高校生の生徒文化について	東京 その他	共
松村和則	家族史からみた村落の変動	福島県北会津郡北会津村 宮城県亘理郡亘理町	共
満田久義	1. 混住化社会と地域対応 2. 過疎現象の新しい動向	滋賀県竜王町と日野町 京都府美山町と京北町	個
光吉利之	現代日本の家族・親族変動	奈良県大和郡山市白上 三重県志摩郡志摩町御座	共
宮崎俊行	現在の社会的・経済的状况を前提とする、農地の所有・利用の在り方いか んと村落		個
武笠俊一	1. 鈴木・有賀・及川以前の民俗学的村落研究の再評価 2. 村落指導者の生活史分析 3. 東北農民の生活意識研究	岩手県東磐井郡旧興田村 福島県岩瀬郡鏡石町成田	個 個 共
村武精一	1. 沖縄・奄美の社会と文化 2. 東南アジアにおける原マレー系諸族の社会と宗教 3. 風土と神社祭祀の世界	沖縄・奄美(南島) フィリピンとボルネオ 島根半島	個 共 共
村中知子	農業生産組織と後継者問題	宮城県鹿島台町	共
森武磨	日本近現代史 — 1920年代農村支配	岐阜県	共
森川辰夫	農家の生活構造	千葉県成田市	共
森村勝	都市および地域の社会史的研究		個
八木佐市	農村社会の伝統と変動 — 韓国農村と日本農村の比較 —	大韓民国 慶尚南道陝川郡陝川面 内容里	個 個 個

氏名	研究テーマ	調査地	個人共同
林 雅孝	1. 地域社会の社会病理 2. 漁村研究	福岡市、広島市 瀬戸内海地区	共 個
原 宏	村落の社会構造と祭祀組織		個
福田 はぎの	1. 明治・大正期在村小地主の経営と家計 2. 小地主経営と親族・同族組織	島根県(とくに出雲地区の漁村)	個
藤井 勝	近世期における子分従属	長野県真島、青木島	個
藤田 弘	比較都市社会学	摂津 上瓦 林村	個
藤本 信義	地域計画における計画単位の研究	埼玉県大井町、神奈川県伊勢原	共
古城 利明	農村自治、地方政治	栃木市、三宅村 その他	個
星 永俊	村落社会の変動と再編成——特に教育との関連で	金ヶ崎町(岩手県) 豊浦町(新潟県) 川崎市(神奈川県)	共
星 真理子	宮座	福井県坂井郡丸岡町	共
星 山幸	現代農村におけるイエと村落の「生活機能」の変容について	愛知県安城市高棚町	個
細谷 昂	1. 戦時期から戦後にかけての農政と農民の対応 2. 現時点における稲作生産組織と村落構造	滋賀県	共
牧野 由朗	1. 豊川総合水事業と流域社会の変容 2. 漁村社会の研究	宮城県亘理郡亘理町	共
牧野 暢	1. 地域社会と大学の関係 —— 日本とアメリカ —— 2. コミュニティ開発論	山形県庄内地方 東三河地方(ことに渥美地方) 主として三重県志摩地方	共 個

中野 彦 夫	有機農業運動と「地域自立」	千葉県および関連一円の提携組織	共
中村 正 夫	1. 対馬村落の社会構成及び郷土制度の展開 2. 沖繩村落の分析(戸籍を中心として) 3. 被差別部落史、その他福岡県下2市の近・現代史など	対馬 沖繩県勝連村 福岡県中間市、宗像市その他	個
新妻 二 男	農業協同組合の組合員教育	宮城県南郷町	個
西田 春 彦	農業集落カードの主成分分析	長崎県対馬 上県町・厳原町	共
似田 貝 香 門	地域政策の動向と展開 — 集団論 —		個
二宮 哲 雄	日本とフィリピンの農村社会の比較研究	日本 — 能登半島、奄美大島 フィリピン — パンガシナン、プロビンス	個
箱山 貴 太郎	稲荷神研究 農業神稲荷が農民の中に浸透して行く過程の実証に努めています。	全国的に	個
橋本 和 幸	現代農村の支配構造	和歌山県龍神村	共
橋本 恵 次	山村集落の過疎化機構の分析(昭56~58)	広島県神石郡三和町 他	個
橋本 梁 司	1. アメリカ中西部農業地域の社会変動(Family Farmの動向を中心に) 2. 僻地自治体と住民	アメリカ合衆国インディアナ州ウエイン郡 及びランドルフ郡 岩手県下閉伊郡田野畑村	個 共
長谷川 宏 二	生産組織の展開に伴う村落の変容	広島県一木集落 他	個
長谷川 昭 一	横瀬村七谷村の村落構造	新潟県加茂市七谷地区	個
服部 治 則	農村社会の基礎構造(かつて調査したことのある山梨県山村を30年間にどこが変化したかあるいは何がかわらないかを調査)	最近4年間は山梨県北巨摩郡増富村(現須玉町) 清里村(現高根町)	個
林 稻 苗	地域社会の家族生活について	岐阜県内の農山村	共

氏名	研究テーマ	調査地	個人共同
竹内 美利	1. 三陸沿海の旧漁業習俗の研究 2. 「むら」の近隣組織と自治機構	三陸沿海漁村地帯	個人共同
武田 共治	1. 地域社会研究の方法論的検討 2. 戦後農業の展開と農村社会の変容	山形県酒田市北平田地区新青渡部落、 福島県北会津村	共
多々良 翼	農業生産組織の展開と家・村落の変容と意義	山形県酒田市、茨城県結城市、富山市八ヶ山、松本市上平瀬	個人共同
谷口 浩司	集落機能の再編と農業のシステム化	鳥取県大山町、東伯町	個人
田野崎 昭夫	社会構造と住民意識	多摩地区	個人共同
民秋 言	地域生活の変容と子どもの社会化	岡山県倉敷市、山形県金山町	個人
(社)地域社会計画 センター	農村の総合開発、農住都市建設	全国各地	委託研究 自主研究
千葉 修	産業組合史		個人
塚本 哲人	東北農村における村落と家族の社会変動	山形県天竜市藤内新田	個人共同
堀 マサエ	地域社会の変動と家族	山梨県勝沼町、静岡市	個人共同
戸 谷 修	東南アジア島岐部地域の村落と家族 沖縄奄美の村落と家族	ジャワ、マレーシア 沖縄	個人共同
中 川 雄	企業城下町における住民生活と地域住民組織	愛知県豊田市	個人共同
中 田 実	山村社会の崩壊と再生——過疎の村の再生の条件をさぐる	長野・岐阜・愛知・静岡の県境山村	個人共同
中 野 哲二	生活・学習・文化形成	鹿児島県の農村を中心として	個人共同

白井明	村落構造の変容過程に関する社会学的研究	福島県東白川郷矢祭町 他	共
菅野正	農村の支配構造	山形県酒田市北平田地区	共
杉岡直人	1. 地域リーダーのライフスタイル 2. 農業後継者のための研修システム 3. 後継者の集団活動が地域農業の発展に与えた効果	北海道	
杉山茂	農家の生活時間調査からみられた農家の生活構造	山形県新庄市	個
鈴木広次	コミュニティの可能性 地域社会の限界性 行政として対応可能な集落の人口規模に限界を見出すことは何をもちたらすこととなるか。	主として九州・沖縄 離島	共 個
住谷一彦	天明3年浅間山噴火により埋没した鎌原村の社会構造	群馬県つまごい村鎌原	共
関順也	地租改正の実証研究	関東、東北地方	個
鷹田和喜三	北海道の開拓村落の形成と母村の文化的背景 — 団体入殖村落を中心に —	北海道帯広市大正町 富山県の母村	個
高野史男	都市・農村関係	甲府盆地	共
高橋明善	農村自治の実証的研究	山形県東田川郷 新潟県北蒲原郡豊浦町	
高橋正郎	地域農業の組織化（農業経営学）	長野県宮田村 他	
田口正己	過疎化農村の子どもの発達への影響	秋田県由利郡島海町	個
竹内隆夫	1. タイの家族・親族 2. 近世初期の家族・親族	タイ東北部・中部 信州佐久地方	共



氏名	研究テーマ	調査地	個人共同
佐々木 衛	比較近代化論 1. 日本と中国の比較社会論 2. 都市と農村の比較研究	福岡県糸島郡前原町	個
佐々木 豊	町村是運動に関する研究		個
佐渡 和子	村落の社会構造	秋田、茨城、沖縄	個
佐藤 三三	現代村落の存在意義・形態を、単に村の残存・解体の観点からではなく、新たな分析枠によってヴィヴィッドにとらえるにはどうしよういか？	青森県黒石市	共
佐藤 正	1. 資本主義的生産様式の下での農業経営様式 2. 水資源開発の農山村への影響に関する調査	中部経済圏	共
佐藤 常雄	1. 近世～近代における稲作生産力の展開 2. 飯沼新田の史的展開	山梨県北巨摩郡 茨城県岩井市	個
佐藤 明	漁村における社会構造と漁業の変容過程 —— 養殖漁業村落の事例 ——	宮城県本吉郡歌津町	個
佐藤 守	学校統合と村落社会 —— 村落における学校統合紛争事例の分析 ——	秋田、富山、神奈川、栃木、茨城の農山村 の数カ所	共
佐藤 康行	村落の人類学的研究	宮城県鳴瀬町宮戸、三本木町新沼	個
沢崎 信一	近世農村社会構造史 —— 幕藩体制の支配と農村構造の変質について ——	北関東、北陸、信州→封建制 社会（幕藩制社会）の農村	個
島崎 稔	環境問題と農山村社会	各地	個、共
島本 彦次郎	沿海漁村の生産構造と村落構造	三重県海山町島勝浦（定置網）	個
清水 由文	農漁村の生活構造と親族組織に関する実証的研究	奈良県大和郡山市日土、三重県鳥羽市石鏡 三重県志摩町御座	共

後藤一藏	区費賦課方式の変化と村の変容過程	宮城県南郷町木間塚地区	個
後藤範章	「地域社会」構造変動論、「地域社会」の多次的設定（仮説）とその 領域の実証的面定	埼玉県大宮市宮原地区（旧宮原村）及び 同市同地区を含む国鉄高崎線沿線地域 （全域）	個
小林一穂	1. 稲作生産組織の再編をめぐる諸問題 2. 地域住民組織（町内会）の現状と動向をめぐる諸問題	山形県鶴岡市 宮城県古川市	共
小林茂	1. 社会科学総合の方法論 2. わが国における大規模模倣作経営の可能性	茨城県鹿島郡旭村	個
小林月子	農業生産組織の研究	岐阜県、宮城県	共
小林文人	社会教育	神輿の集落	共
斎藤正二	地域社会の構造とその変化	静岡県大田市、白浜地区	共
斎藤吉雄	コミュニティの再編成——目的的社会変動の一事例——	鶴岡市、古川市	共
酒井恵真	地域産業の展開過程と住民生活の課題	北海道網走管内、湧別町、上湧別町	共
酒井俊二	日韓漁村社会比較研究	本年：和歌山県那智勝浦町 明年：韓国厚浦村	共
桜庭宏	「大正デモクラシー」の地域的展開	茨城県下全域	共
坂井達朗	遠洋漁村の変化と対応	三重県度会郡田曾浦	個
佐々木篤信	農業労働者の生活と意識	福島県大沼郡本郷町	個
佐々木交賢	デュルケーム社会学研究、フランス社会党の研究		
佐々木徹郎	コミュニティ・デベロプメント、教育、日本の都市	日本、東南アジア	共

氏名	研究テーマ	調査地	個人共同
川越淳二	漁村社会学の方法と視角	三重県志摩半島	個人
河村望	地域社会とパワー・エリート	関東・東北	共
川本彰	日本近代化の特質		個人
神田嘉延	農民の賃労働者化と農民教育の課題	鹿児島県内、出水郡野田町、肝付郡田代町	個人
菅野俊作	日本資本主義と皇室財産	旧下総新冠御料牧場	個人
菊間満	在村型の巨大山林所有と入会集団の対抗的生産力発展の歴史について	岩手県九戸郡山形村	共
君塚正義	村落社会と農家生活——現状と展望——	栃木県上河内村・益子町	個人
桐原邦夫	日本近代史、茨城県近代漁業史	茨城県	個人
金城一雄	沖繩農村の生産構造と生産組織（労働組織）の研究	沖繩県国頭村字奥区	個人
工藤清光	高位地域農業複合化に関する研究	未定	共
久保良雄	農業就労者の高齢化と農村集落の活性化	岩手県下（大野村）	共
黒崎八洲次良	1. 現段階の農業集落と集落間諸関係 2. 集落名についての社会学的研究	松本平周辺 北海道 後志、石狩、上川 ほか	共
黒柳晴夫	農村家族の変容、村落構造の変容	岐阜市黒野地区 渥美半島（渥美郡田原町）	個人
小池基之	ケネー「経済表」およびその背景についての研究		個人
後藤和夫	庶民の生活史に関する総合的研究 その中での特担課題は、漁民（海女）生活史の研究	三重県志摩郡志摩町	共

大須	治	兼業農家	長野県伊那市	共
大津	昭一郎	1. 漁港地域の社会経済的波及効果 2. 日韓漁業問題研究	三崎、小田原、那智勝浦 韓国原浦、釜山	共
大沼	盛男	1. 農地問題・農地政策 2. 農村地場産業の育成と主体に関する研究	北海道 士幌 清里、富良野	共 個
大坪	省三	都市、村落における交通および交通手段についての社会学的研究		個
大和田	道子	生活活動組織と村落との関連について		個
岡田	祐成	直接的研究テーマは持っていないが、農村福祉とくに、農協や自治体の役割について興味をもつ		共
交野	正秀	1. 農業構造改善事業と村落 2. 協議費分析からみた村落の変容 3. 「東海」性の追求	愛知県渥美地方 滋賀県八日市市 静岡、東三河	共 共 共
勝又	猛	1. 広告に関する情報社会学的研究 2. 「へき地」の定住条件に関する社会学的研究	山形市 山形市鶴岡市	個 共
馬田	由紀子	1. 近江農村の村落構造 2. 土地所有権の移動と家族の継承——明治初期より現在まで——	滋賀県マキノ町	共 個
加藤	正泰	スイス社会学研究の展開	スイスのアッペンゼル	個
鎌田	哲宏	社会移動の研究	室蘭市 伊達市	個
神谷	一夫	地域農業の展開と農協の機能	山形県余目町、岩手県松尾村	個
柄沢	行雄	農村の社会変動	新潟、山形、長野 他	個、共
川口	詒詩	家族形態循環と農地移動	山形県余目町、岩手県松尾村	個

氏名	研究テーマ	調査地	個人 共同
岩崎信彦	部落有林野とその現代的活用 — 村落構造の変化と問題点 —	長野県南佐久郡川上林	個
岩本由輝	歴史における国家と地域	東北、日本、世界（東北、日本を担当）	共
上羅広	1. 東北農村における運動諸文化の変容過程に関する実証研究 2. 現代東北農村社会生活における「イエ」と「ムラ」	岩手県胆沢郡金ヶ崎町百岡地区	個 共
上田喜三郎	陶土の生活史	鳥取県八頭郡河原町牛戸（牛戸窯）	個
上野和男	日本の家族、祖先祭祀、官座	現在は奄美、対馬、近江など	個、共
宇佐見繁	農民層分解論		
内田司	水田利用再編対策下の農業生産の展開と「村落」	福島県北会津村	共
内山政照	農家世帯員の社会的逸脱行動（自殺等）、農業教育		
榎彰徳	1. 琵琶湖周辺漁村の構造分析 2. 都市化漁業地域における「漁村」構造の変容 3. 外国漁業論	琵琶湖周辺漁村 大阪湾周辺漁村 丹後半島の漁村	
江馬成也	東北村落と若者組織	東北地方の村落社会	個
小山陽一	日本の大企業労働者の社会的性格	豊田市（トヨタ自動車労働者）	共
及川伸利	慣習と法律 — 扶養、相続、入会権などに関連させて — 集落財政	未定	個
大内雅利		佐賀県武雄市、山形県高島町	共
大島真理夫	近世村落共同体と家格制	近畿地方、岐阜、長野、山梨など	個

# 会 員 研 究 動 向

1983年1月8日現在

氏 名	研 究 テ マ	調 査 地	個人 共同
青 井 和 夫	Family Life Course と世代間関係の研究	静岡市	共
青 木 辰 司	現代農村における生活機能の変容過程	秋田県由利郡仁賀保町 雄勝郡稲川町	共 個
安 孫 子	1. 日本地主制の解体過程の実証分析 2. 戦後農民的土地所有をめぐる諸問題 3. 日本近代村落史	主として1, 3について ( 宮城県遠田郡南郷町 宮城県登米郡米山町	個
阿 部 徳 三 郎	地方自治制度と農村都市化の問題	国内及び東南アジア	共
有 木 純 善	焼畑林業システムによる自然環境の保全と活用	主として東海地方	個
安 藤 慶 一 郎	村落社会と民俗宗教の展開	新潟県燕市 小中川地区 他	共
伊 賀 光 屋	1. 離村脱農者の家族史…湯屋男にみる寄子制度と同郷者組織 2. 西蒲原のシンルイの構造 3. 方面委員活動よりみられた細民の地域差	東京本所区、大阪下寺町	共 共 個
池 田 正 敏	地域住民組織の比較分析	新潟県三条市、東京都目黒区、マニラ	共
出 井 善 次	中小地主地帯における農地改革の特質	関東農村( 埼玉県東松山市域 )	個
井 上 和 衛	1. 農業機械施設の利用組織に関する研究 2. 農地流動化の諸条件に関する研究	青森県石里市、長野県下、愛知県西尾市 広島県庄原市、宮崎県都城市 福井県鯖江市、熊本県菊池郡旭志村	共